

県内医療機関における ゲーム・インターネット依存 の診療実績に関する調査

演題番号 0-10-2-1

山梨県立精神保健福祉センター
○木村由美 石川大輔



日本公衆衛生学会 COI 開示

発表者名：木村由美、石川大輔

演題発表に関連し、発表者らに開示すべき
COI 関係にある企業などはありません。



はじめに

- 近年、スマートフォンやインターネット等の利用が低年齢化し、子どものゲーム・インターネット依存（以下、ゲーム・ネット依存と言う）が問題化している。
- 長期に渡るゲーム・ネット依存は、子どもの精神や身体に不調を及ぼし、生活面においても様々な悪影響が出現していると言われている。



目的

- 山梨県内における子どものゲーム・ネット依存に関する診療状況の実態を把握し、今後の本県における依存症対策の事業展開の一助とする。



方法

調査対象：県内の精神科、小児科を標榜する医療機関に勤務する常勤医師のうち、所属機関や関連する団体等から調査票配布の許可が得られた医師

調査方法：調査票を配布し、紙面又はインターネットで回答を求めた。

調査期間：令和3年12月1日～12月28日

対象期間：令和2年4月1日～令和3年3月31日

調査項目：設問10問



倫理的配慮

- 本研究は当センターの倫理審査委員会の承認を受けている。
- 回答に患者の個人情報に含まれない。



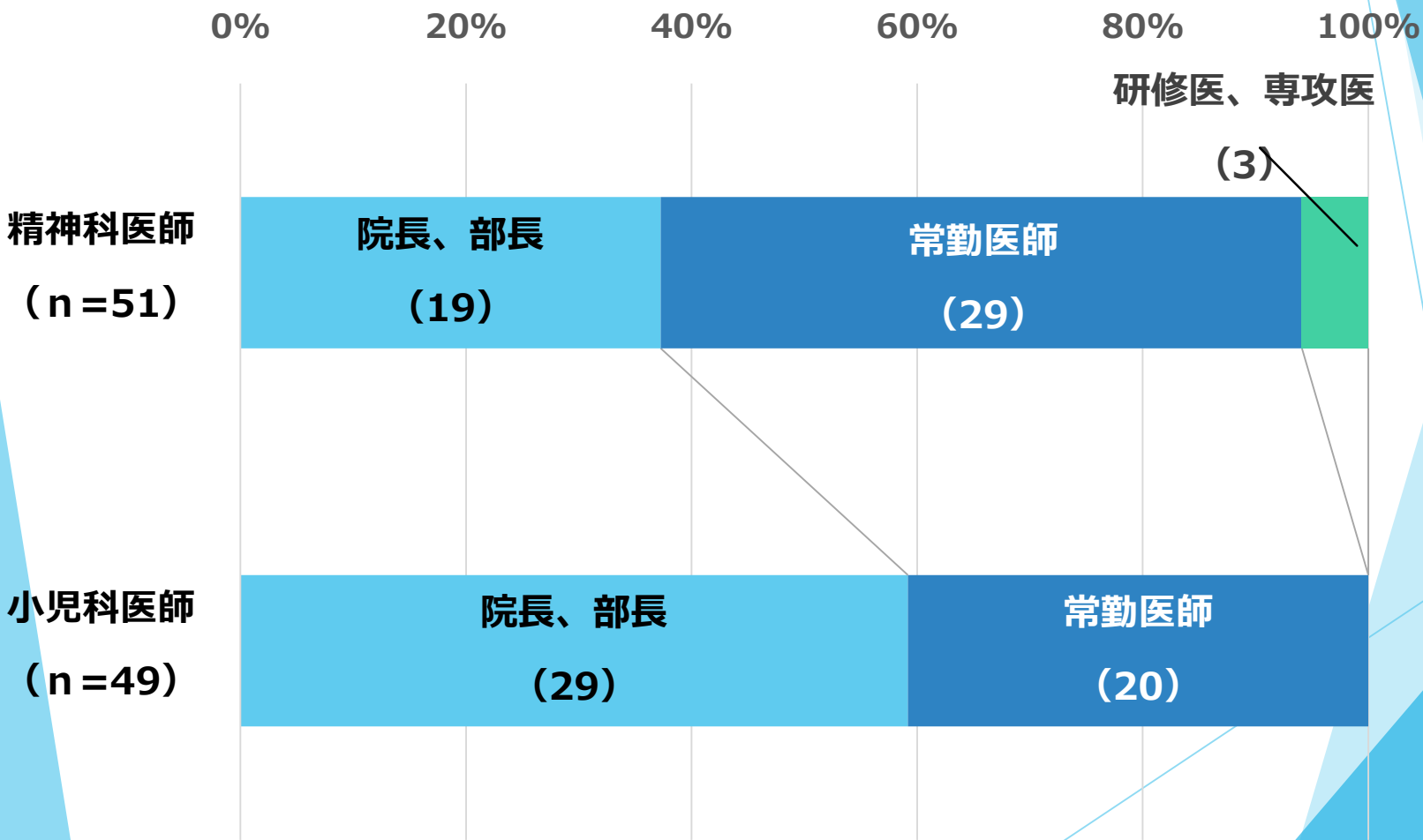
結 果



該当172名中(精神科医87名、小児科医85名)
100名 (精神科医51名、小児科医49名) から
回答を得られた (回答率58%) 。



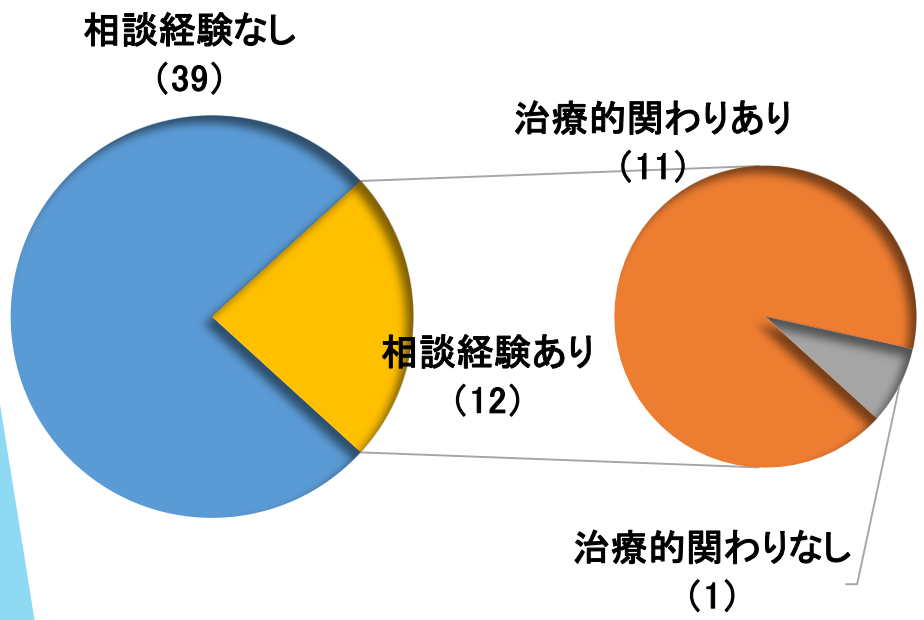
回答者の所属・職位



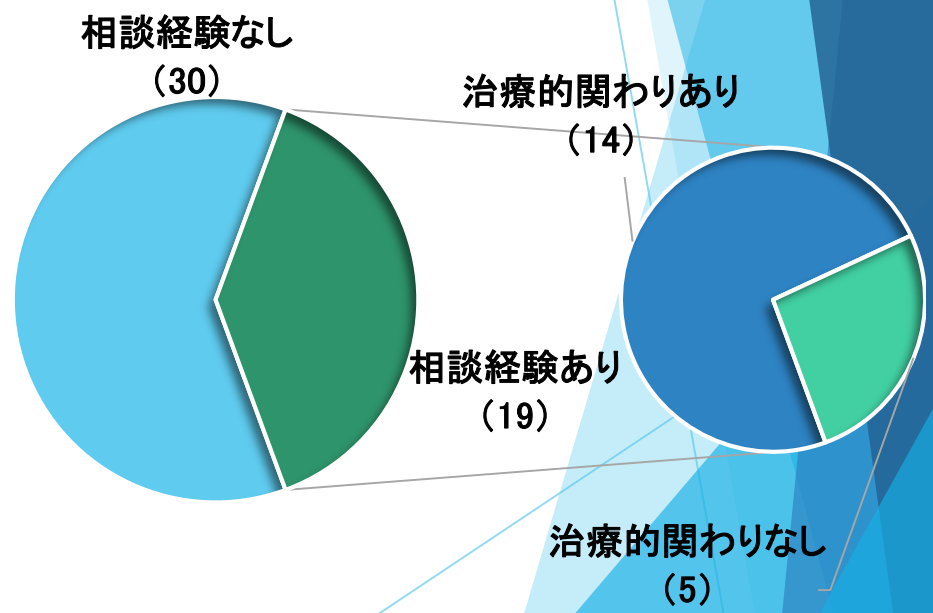
「相談の有無」及び「治療的関わりの有無」

ADHD適正流通管理システムへの登録の有無は
治療的関わりの有無に影響しなかった

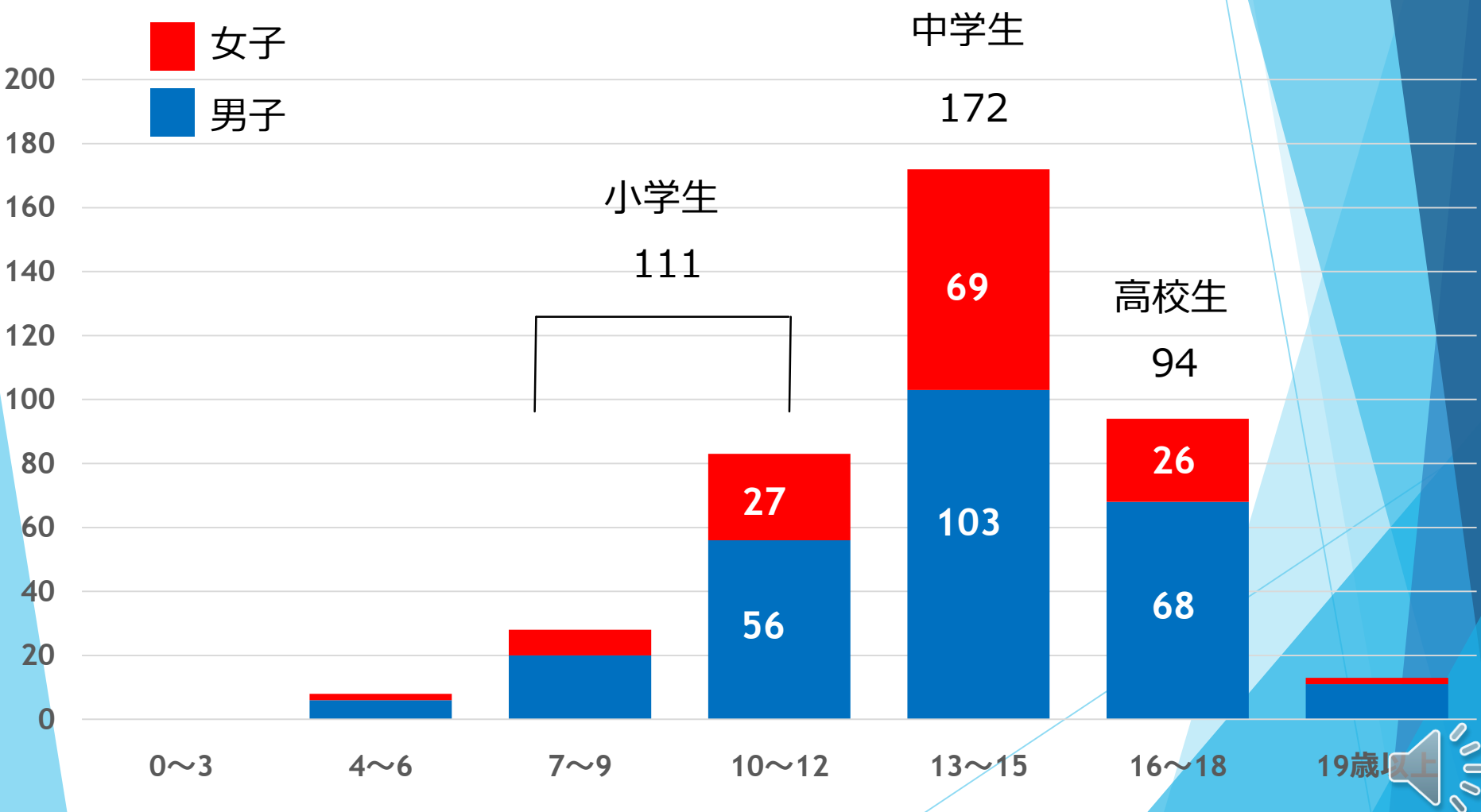
精神科医師 (n=51)



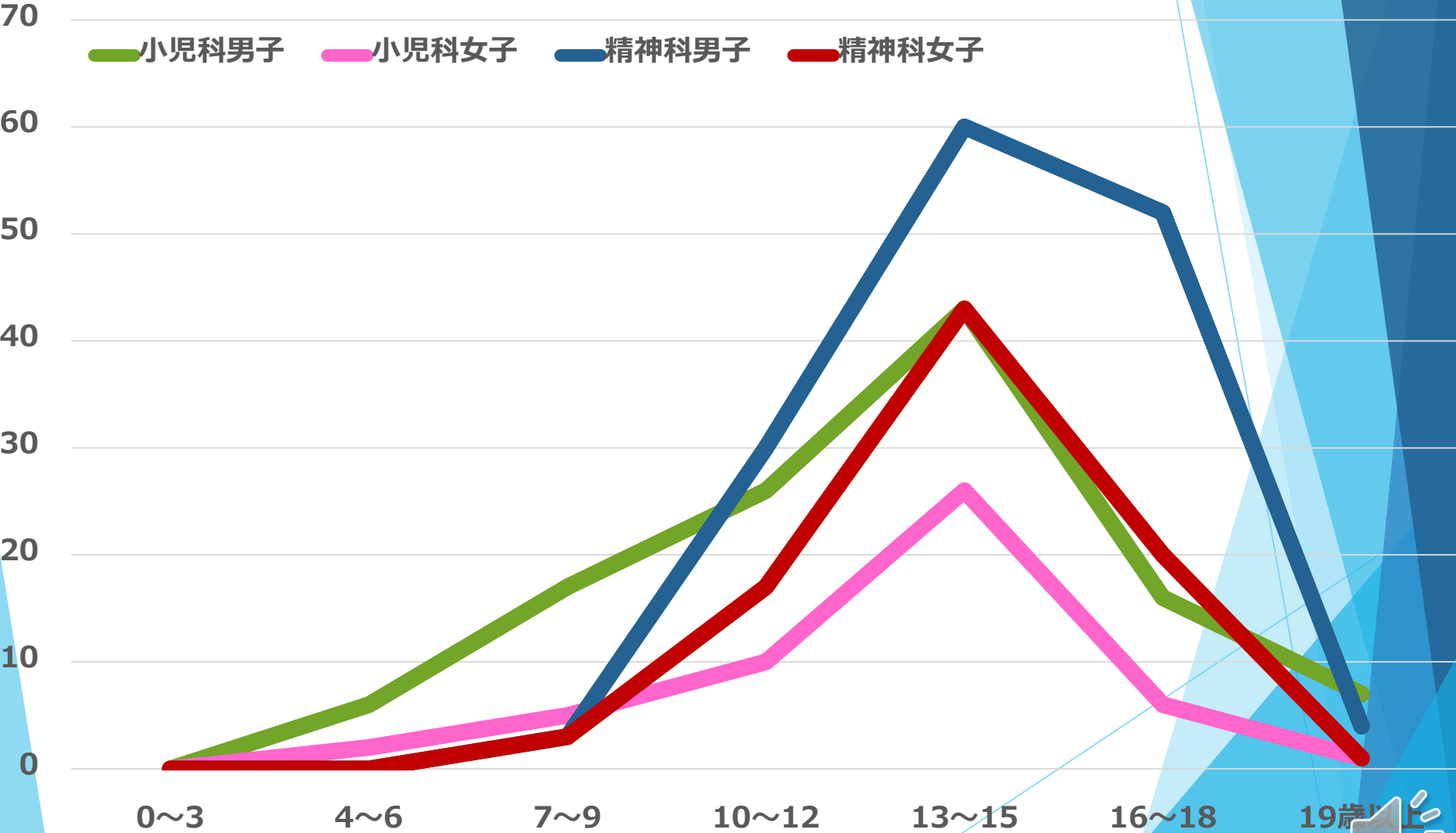
小児科医師 (n=49)



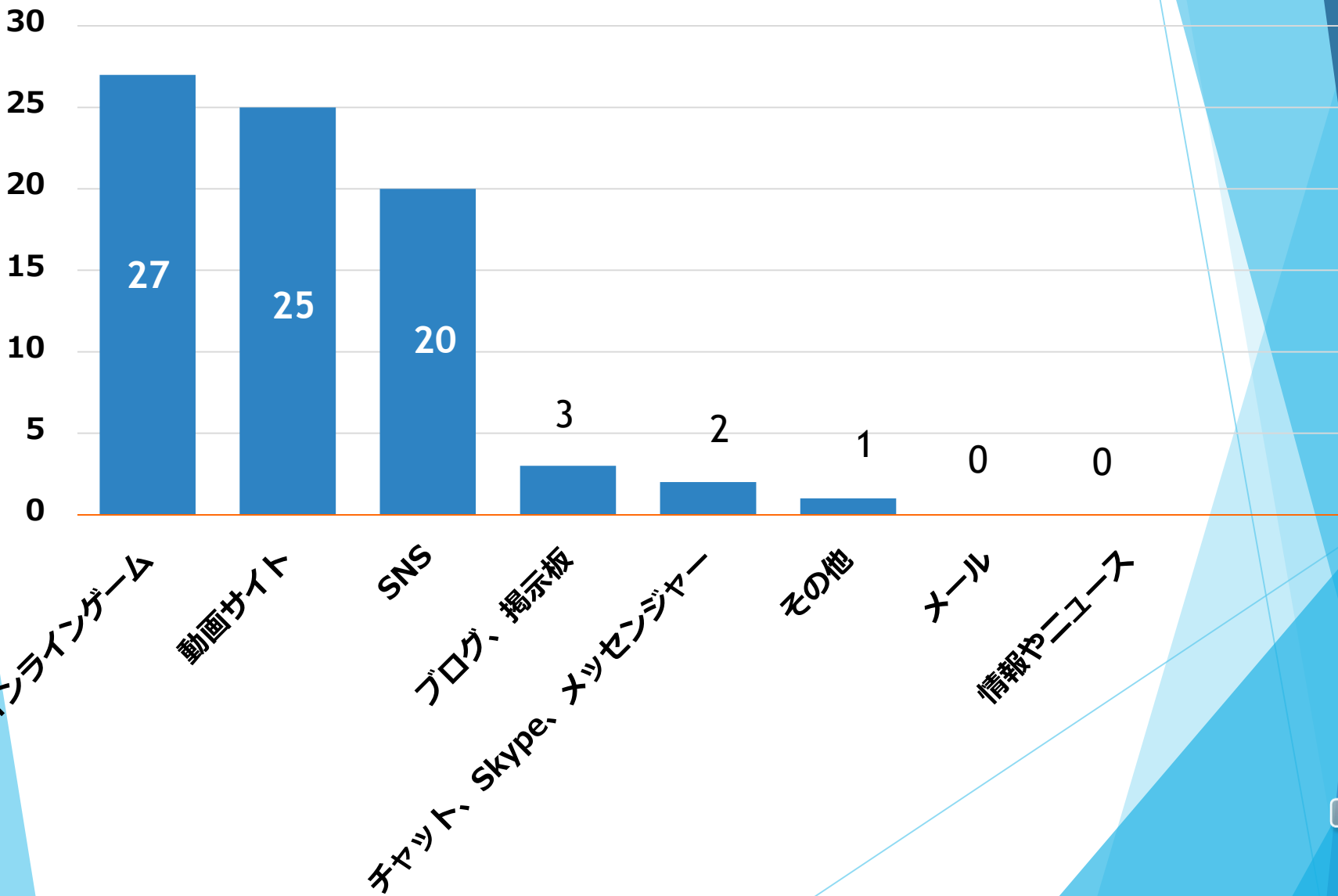
相談者の内訳(年齢別・性別)



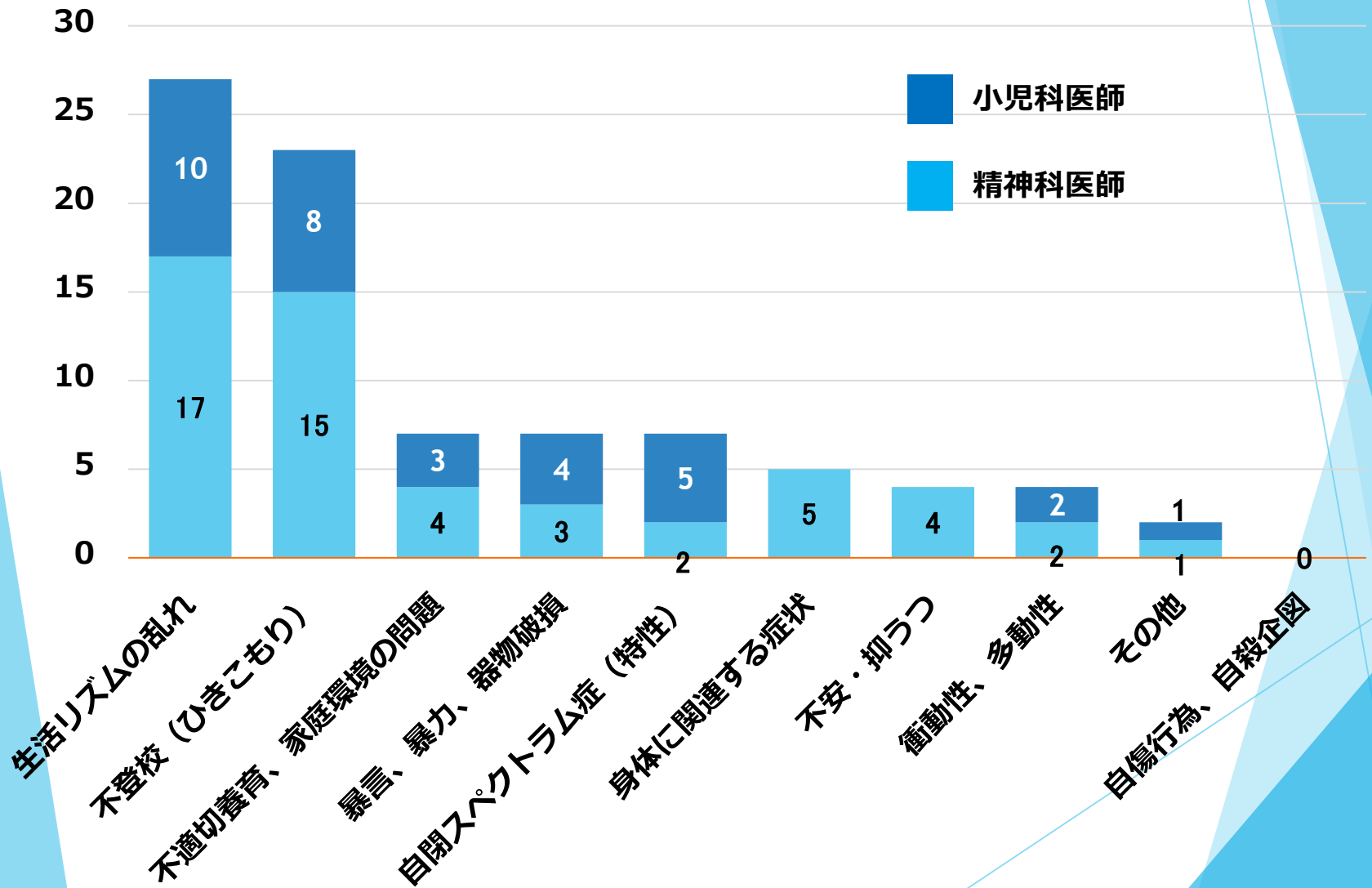
相談者の内訳(科別・年齢別・性別)



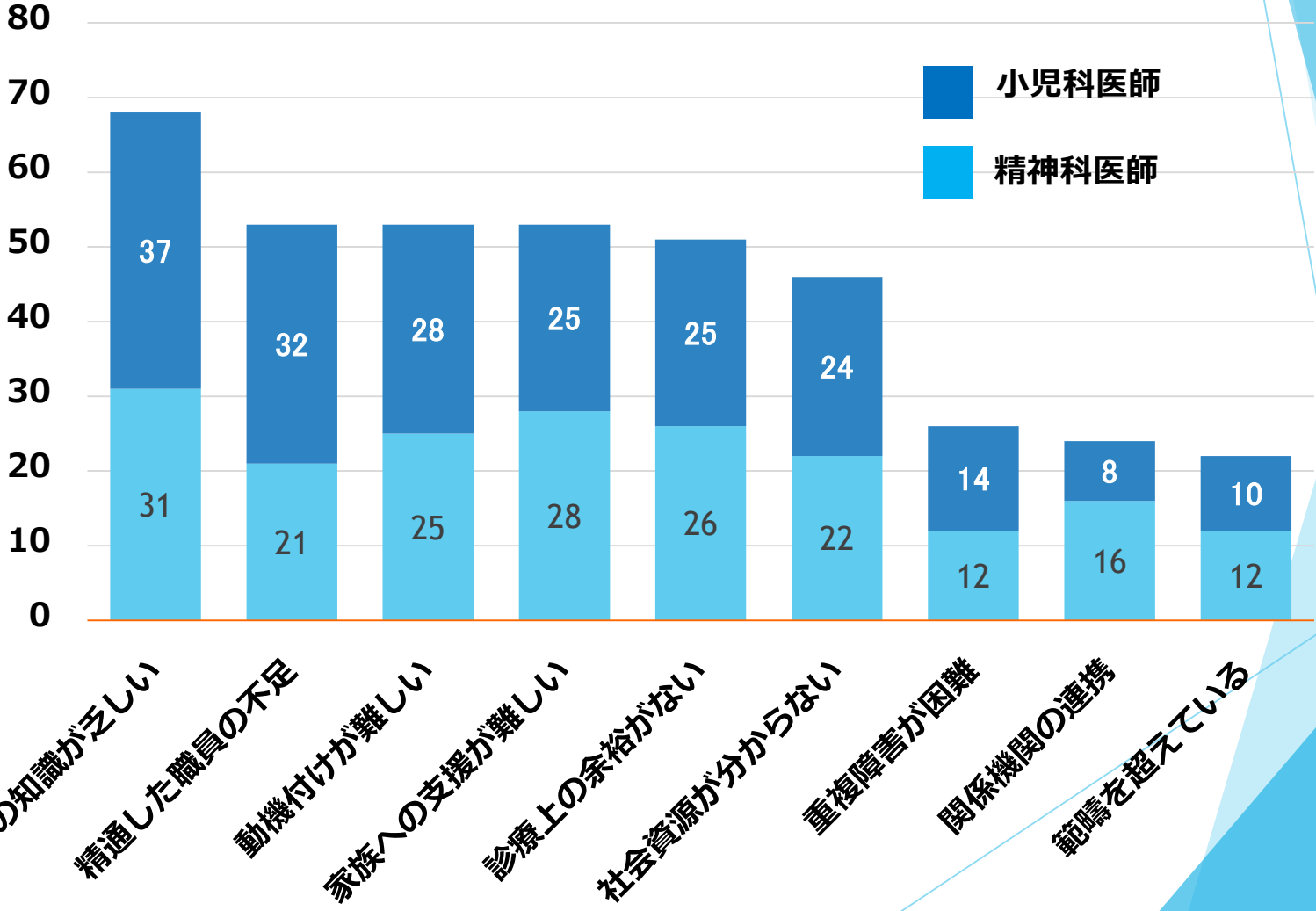
問題となっているインターネットサービス



ゲーム・ネット依存に付随する問題

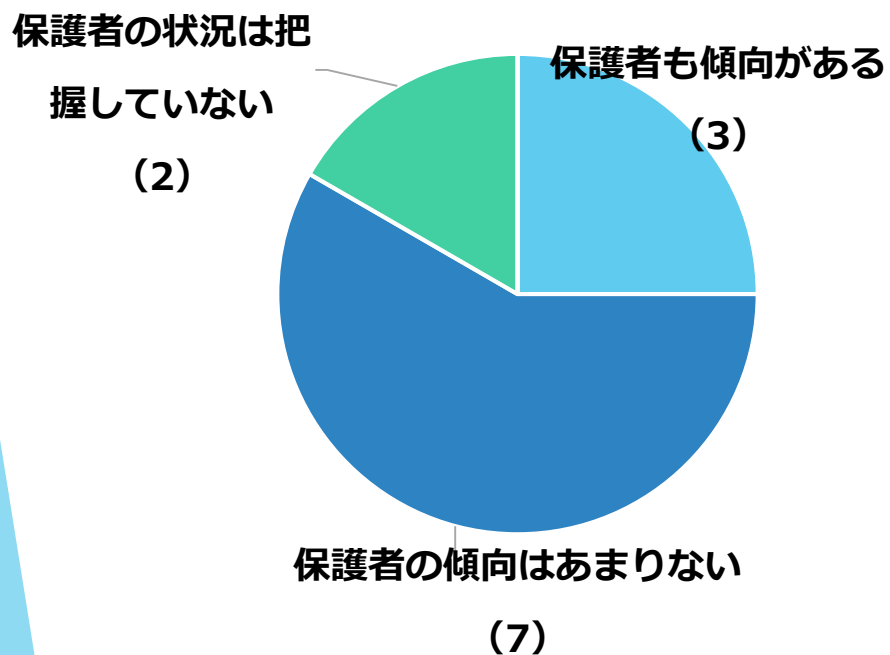


診療において課題と感ずること

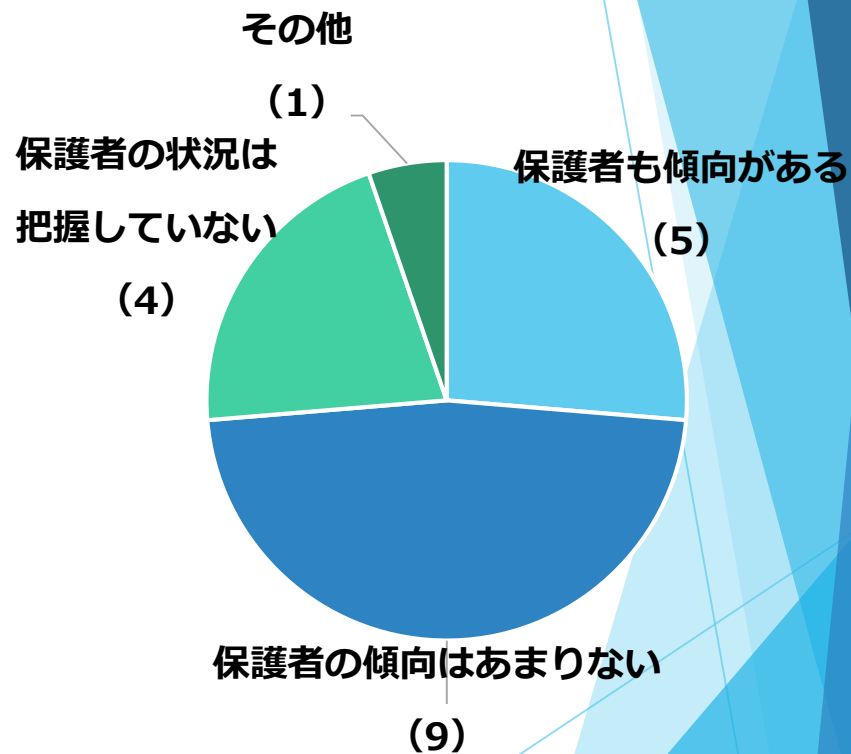


保護者の傾向

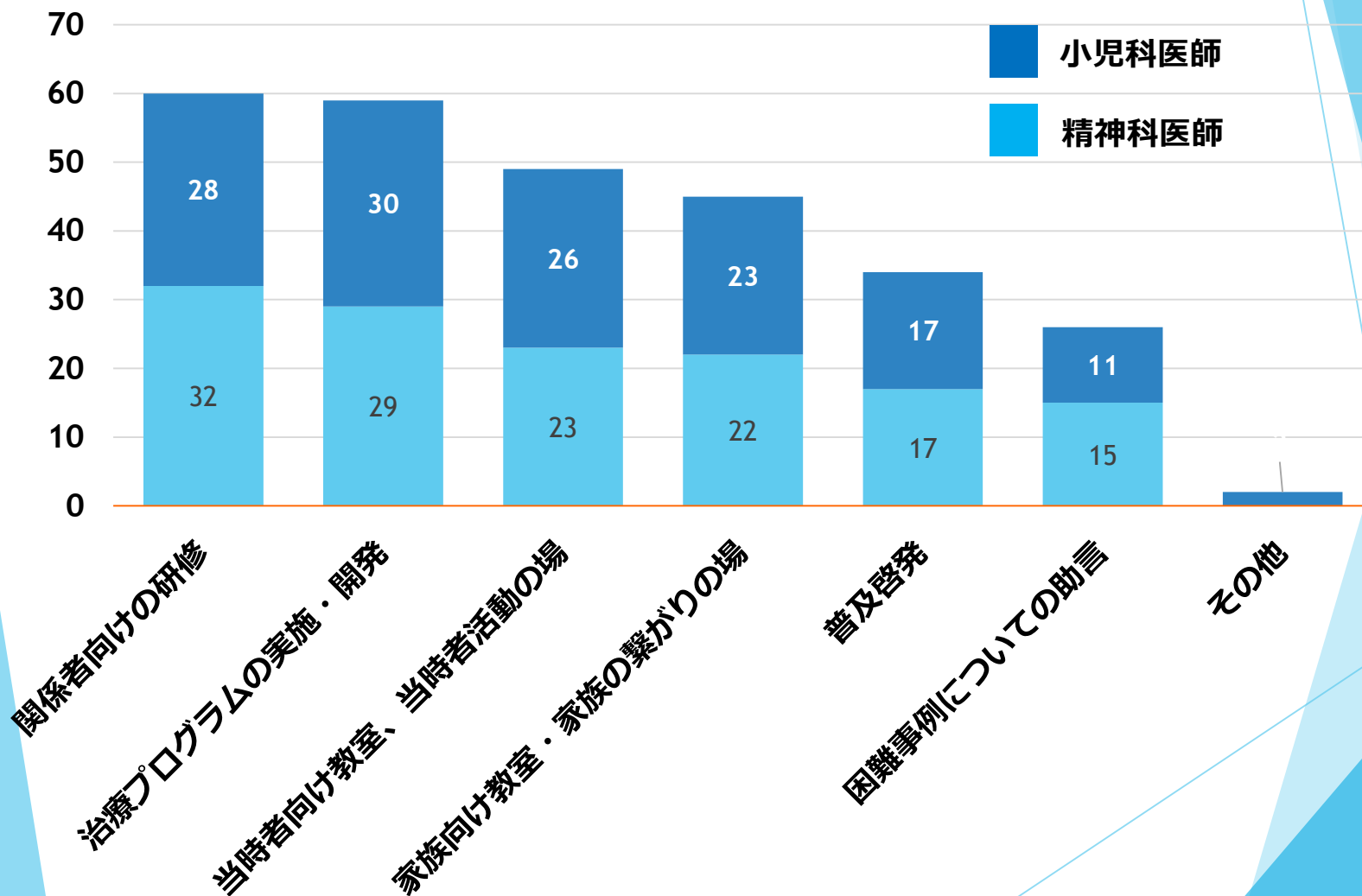
精神科医 n=12



小児科医 n=19



支援体制充実に重要と思う施策・取組み



自由記載（一部抜粋）

- 病気自体を知らなかったので
普及啓発やスタッフへの教育が前提である。
- 今後、ゲームネット依存の子どもは増えると思うので
医療者側の準備が必要。
- 小児科なのか精神科なのか、どこに受診したら良いのか
患者も迷っているように感じる。
- プログラマー、e-スポーツ等、「仕事」や「社会的役割」
等を得ている人もいるので、障害の区別が難しい。



自由記載（一部抜粋）

- 不安をあおるより、根本にある**子どもの孤立**や保護者の困り感にアプローチできる仕組みが作れたらよい。
- 依存に陥るかどうかは、**保護者のITリテラシーや経済的・時間的余裕**に左右されているように思う。
- 香川県のように**自治体からネット利用時間を具体的に明示**することで、制限が少しできるのではないか。
- スマートフォンを子どもに渡す時に保護者ができることがあれば**、院内でも**パンフレット**を置きたい。



考察

1. 精神科医小児科医ともに、子どものゲーム・ネット依存の相談を受けており、治療的関わりも持っている。互いの役割を認識し、適切な連携がとれる体制が必要。
2. 相談対象者は、13～15歳の中学生が最も多い。併せて小学生の相談も少なくないことから、義務教育を担当する関係機関との連携が必要。



考察

3. ゲーム・ネット依存に付随する問題は、生活リズムの乱れや不登校だけでなく、家庭問題、身体症状、精神科的症状、問題行動等、多くの問題が含まれており、医療機関だけでの解決は不可能。
4. 医師自身の知識不足や、精通した職員がいない等、医療者側の体制が不十分と感じている医師が多いため情報交換の場や、研修の場が必要。



まとめ

今回の調査を踏まえ、当センターで実施すべきこと

1. **医療者向け研修会**（精神科・小児科）の開催
2. **関係機関間の情報交換と連携促進の場**の設定
3. 教育委員会、子育て支援局等との**庁内連携**の促進



ご清聴有り難うございました。

